九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

La Comédie humaineに描かれた地方貴族の意味するもの

西岡, 範明

https://doi.org/10.15017/2332691

出版情報：文學研究. 76, pp.61-79, 1979-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

La Comédie humaine に描かれた地方貴族の意味するもの

西　岡　範　明

1850年5月，齢五十の門をくぐり抜けたバルザックは，もはやハンスカ伯爵夫人でもなければウクライナの大地主でもなくなった四十九才の妻を，16年前にもまさる愛をもって，北欧数百里の惨澹たる冬の旅ののち，パリの新居にともなって帰ってきた．この時すでに回復不能の重病にかかっていたとはいえ，やがて二箇月後に訪れることになる死への予感はまだ無い．そして，身のまわりに贅美をこらす余裕はあったものの，いまは一介の平凡な小金持にすぎぬ夫人のために，いかに豪華にして快適な新居を用意したか，さらに長い間その新居の準備と管理につくさせた老母を無情にも彼らの到着前に退去させたことは余りにも有名である．世事人情を知りつくした五十男，冷厳な現実小説の大家バルザックをして，その敵手の批評家たちはもちろん，その近親や好意的な知人たちのきびしい批難の的となるこうした行為に駆りたてたのはいったい何であろうか．二月革命の衝撃がなくても，すでにその前年の1847年から彼の創作力は，持病の心臓悪化とともに，とみに衰えつつあった．彼が結婚生活に安息と，それによって出来ることなら体力，そして創作力の奇蹟的回復を願ったことは十分考えられる．彼のこうした願いは以前から切実な形で吐露されていた．

〔……〕 je m'arrange pour vous faire riche, *de mon chef*, comme disent les notaires. 〔……〕 soyez riche si vous pouvez, très riche! et ne vous désolez pas si vous êtes pauvre. Celui qui aura su payer 400,000 de dettes et vivre, saura bien les gagner pour sa

belle 〔……〕 [1]

〔……〕 je veux une vie heureuse, matériellement parlant, surtout la tranquilité. Une fois *garni de mon lp.*, je serai comme au couvent avec lui, je n'ai besoin ni du monde, ni de succès, ni d'ambition 〔……〕 [2]

安息はたしかに一時的に訪れた．地獄のパリに戻る日を前にウクライナで彼は，その新婚の喜びを，親身の友人ズュルマ・カロー Zulma CARRAUD にこう書き送っている．

〔……〕 il y a trois jours j'ai épousé la seule femme que j'aie aimée, que j'aime plus que jamais et que j'aimerai jusqu'à la mort. Cette réunion est, je crois, la récompense que Dieu me tenait en réserve pour tant d'adversités, d'années de travail, de difficultés subies et surmontées. Je n'ai eu ni jeunesse heureuse, ni printemps fleuri, j'aurai le plus brillant été, le plus doux de tous les automnes.[3]

しかし彼には少く見積っても7万フランの借金とこれからの生活費を稼ぎ出す必要があった．以前のような，いや以前彼が想像していたような大金持ではなくなったバルザック夫人の懐をあてにすることは彼には出来なかったのである．彼はあいかわらずその仕事部屋に囚人のように閉じこめられるだろう．

Je travaille beaucoup, car je ne vois rien en beau. 〔……〕 Tout est désespérant 〔……〕 la vie est lourde. 〔……〕 [4]

バルザックはいつも現実生活では幻想家であったが，今度もまたその癖が出たのであろうか．あるいはささやかな安息でもいまの彼には必要だったのだろうか．それともハンスカ夫人には別の魅力があったのか．1833年はじめて彼女に会った時，彼は彼女のなかに比類ない美を見たと言っている．

〔……〕 je ne te parle pas des richesses colossales, qu'est-ce que

c'est que cela devant un chef-d'œuvre de beauté que je ne puis comparer qu'à la princesse de Belle-joyeuse en infiniment mieux. 〔……〕 J'ai été enivré d'amour.[5]

とすれば *Béatrix* の Calyste が踏み迷った回顧的幻想がよみがえり，それに四十女の成熟しきった女性美が加わったとも考えられる．美はたしかに，それだけで慰めでもあり励ましともなる．しかも会えばつねにバルザックの愛を受け入れてくれた唯一可能の結婚相手であった．だが彼自身はつねに彼女だけを愛し続けていたとは言い難く，特にハンスキ氏死去の報知のある前年1841年ごろは彼女への愛の最大のあかしである手紙も僅か5通を数えるのみであった．それが一度ハンスキ氏の死去を知るや，30年代にもまさる頻繁な文通を開始する．そこにわれわれは，新居の飾り立て，母親追い出しなど彼女の要求に唯々諾々と従った事実とともに，彼バルザックの俗物性を見ざるを得ない．彼の抜きがたい貴族への憧れを，である．新妻は伯爵夫人の称号は失ったものの，ジェヴスキ伯爵家令嬢であったことに間違いなく，七月王政下ではもちろん，二月革命後においてもなお貴族階級の存在と威力は否定できず，彼自身がジェヴスキ家との縁戚関係から栄位を，さらには栄爵を手にすることも不可能ではないと考えられた．[6] 財産の無い貴族は貴族でないと叫ぶ彼だが，おのれの手でその財産を作る意気込みはあったろう．そして「身分と財産があればなんでも出来る．」貴族婦人への憧れが彼のかねてからの考えと矛盾する行動に走らせたとすれば，彼はまたその憧れによってもう一つの矛盾を忘れかけた．彼の生活の場はパリ以外に考えられなかったのに，敢てウクライナさもなければモスクワでもペテルブルグにでも住もうと決心している．もっともそれはすぐ冗談だと打ち消しているが．

Si cette séparation durait encore, j'irais à Petersbourg, et je dirais à votre auguste empereur: Voilà un Russe de plus, mais je veux ma mie, 〔……〕 Allons, il vaut mieux souffrir un jour dans ce délicieux Paris 〔……〕[7]

パリ人バルザックが作家としての立場からも地方あるいは田舎に対して強い軽蔑の念をあらわしていることはすでに述べた.[8] その軽蔑は地方貴族にも及んでいる，特に貴族婦人に対して．異国というロマンチックな夢を与えることがあったにしろ，ヴィエシホヴニヤ Wierzchownia は大いなる田舎であったはずである．その城館は宏壮だがフランスで最もありふれた程度の快適ささえ無いところではなかったか.[9] いわば田舎貴族婦人の最たるものともいうべきハンスカ夫人が，彼の眼にどう映っていたというのだろうか.

〔……〕c'est bien le diamant de la Pologne et le joyau de cette vieille et illustre famille Rzewuski.[10]

結婚してからもなお，こうした讃辞を吐かせたハンスカ夫人は *La Comédie humaine* のなかであれほど揶揄嘲笑をうけた田舎貴族婦人ではないことは言うまでもないだろう．かつての彼女の美と巨富と貴族称号と，フランス語小説を取りよせて読むだけの才知などは彼女だけのものではなく，*La Comédie humaine* はそうした貴婦人にみち溢れているのである．性格さらには人間そのものの魅力と言ってしまう前に，その人の生活環境を抜きにして人物を論じられないとしたバルザックが，地方貴族をどう区別していたか，別格的な人々はどのような人物であったかを見てみたい気がする．Aurée d'ESNEVAL 女史は貴族婦人は田舎女の範疇に入らぬことを論証しているが，それには条件があるようである．[11]

1829の *Les Chouans* 以前の，変名による文学修業時代の作品は，ほとんどが貴族を主要人物にしているが，これらは貴族性またはその地方的性格をまじめに検討するほどのものではない．ただ当時は，作家も読者も非凡でファンタスチックな人物を好んだだけのことである．スコットに魅せられ，自らも Lord Rhoone などと気取った筆名を使ったこの若き伝奇と感傷の小説家が，しかしながら1829年には，ロマンと裏腹の，パリッ子的機知を命とする法典ものの大成 *Physiologie du Mariage* に，相も変

わらず仇な伯爵夫人，公爵夫人を登場させて警句をまき散らしながら，その一方では，はじめて Honoré Balzac の実名を冠した本格的歴史小説 *Les Chouans* において，のちの全作品を通じてみられる重厚な，厳しい批判精神をもって現実の貴族の実態を描破する．もっぱら記録と聞き伝えによって造型された1799年の貴族像はその後彼が親しく接してからのそれと大きく変わっていない．ここに登場する貴族と僧侶たちは，自由と独立の原理つまり人間の理性の灯を守る質朴剛健の共和政府軍兵士に対し，己れの利益のため王政復古を願い，それゆえ神と王に忠誠を捧げる狭小な反動家たちとして描かれている．それが歴史的必然の姿であるなら，かつて *Du Droit d'Ainesse* (1824) や *Histoire impartiale des Jésuites* (1824) を書いて与党の王制派をくすぐったバルザック，さらにブルジョワ王・ルイ・フィリップ王政下に一層堕落したと思われる貴族になおも恋々たるバルザックは全く自家撞着の妄想家であったろうか．一見して感じられる彼の知識と行為のこの矛盾は，実は彼の心奥にある根強い理想主義の結果であり，またはその養分でもある．そしてそれは生活者バルザックには，しばしば断層的な様相を帯びて現われる．理想と現実が真向うから衝突するとき，彼は作中人物の体内に入るかと思えば観察者に戻り，その区別が朦朧とするなかで筋が進行し，真の小説のモラリスムを醸成するのである．La noblesse oblige という貴族の使命はその複雑な筋のなかで呈示されるだろう．だからバルザックはカストリー侯爵夫人 la marquise de Castrie の軽佻さに手ひどい傷手をこうむりながら，その侮辱への復讐をただ夫人にだけにとどめ *La Duchesse de Langeais* によって彼女のコケットリーを罰したのである．

しかしながら *Les Chouans* で断罪されるのは，実は貴族全般ではない．

> Les chefs de cette guerre entreprise pour Dieu et le Roi ressemblaient bien peu aux portraits de fantaisie qu'elle s'était plu à tracer 〔……〕 ces gentilshommes *de province*, tous dénués d'-

expression et de vie 〔……〕 Ces physionomies paraissaient annoncer d'abord plutôt un besoin d'intrigue que l'amour de la gloire 〔……〕[12]

〔……〕 il était bon, poli et spirituel à la manière de ces gentilshommes qui, après avoir fini leur éducation à la cour, *reviennent dans leurs terres*, et ne veulent jamais supposer qu ils ont pu, au bout de vingt ans, s'y rouiller.[13]

彼らブルターニュ及びフランス西南部の田舎貴族たちには，作者の他にも批判者がいる．それはパリ貴族である．デュ・ガ夫人 Mme du Gua はモントーラン侯爵 le marquis de Montauran（これも宮廷に伺候したことのない地方貴族なのだが）に忠告する．

Ce n'est pas, j'ose l'espérer, la scène très ordinaire que vous avez eue avec ces *manants* qui peuvent vous accabler 〔……〕[14]

この二種類の貴族間の違和は，庶民の間にもあってパリの密偵コラタン Corentin が惜しむのは「ブルターニュまで持ってこれぬ世界に唯一つのパリ」であった．いや事はパリ対地方だけではない．この内戦で敵味方となって戦う兵士たちは「町のブルターニュ人 les Bretons des villes」と，「農村のブルターニュ人 les Bretons des campagnes」なのであり，彼らが相戦う理由は，後者は無知と狂信から，前者は貴族・教会の没収財産の取得権のためである．[15] しかし，彼らの果敢さ，そのエネルギーはむしろ作家に讃嘆の眼でみられており，のちになってその英雄的な面が否定されてくるようになっても，その醜さと害は政治の欠陥によるものとされる．*Les Paysans*（1844～）などの農民はその甚しい例であるが，ここでも最も劇的効果と思想的意味を持ってくるのは，彼ら農民が当面の敵である地主貴族を食い，自らが成り上ろうとすることである．

地方貴族の無力化，彼らがブルジョワに侵食されてゆく過程は，その社会構造が狭小で単純なゆえに，パリ以上に生ま生ましい形で進行する．受身になって必死に自分を守ろうとする田舎貴族の物語はひとつならずあ

る．革命の挫折とともに没落して，いまはプチ・ブルジョワの枠にも入らぬデュ・ブスキエ du Bousquier は，アランソンの名門ブルジョワのコルモン嬢 Mlle Cormon を騎士ヴァロワ Chevalier de Valois と争って勝ち（*La vieille Fille,* 1837），さらに妻の財産を利用して巨財を積み，その財力と狡智によって，かつては「聖母と匹敵されるくらいに土地の者から尊敬された典型的な地方貴族 une vraie noblesse de province である」[16] 名門デグリニヨン d'Esgrignon 家の御曹子と姪を縁組みさせる（*Le Cabinet des Antiques,* 1836～39）．この1830年の rivalité の結果は1799年のそれよりももっと貴族の惨めな敗北となっている．彼らをこのように描かしめたのは，シャルル十世と彼よりもなお反動的なヴィレール内閣やポリニャック内閣が亡命貴族の損害補償や長子相続法，選挙資格制限など王と貴族の威信にかけて強制しようとしていた20年代末期の世相と，ブルジョワ王ルイ・フィリップの最盛期で既に爵位が有名無実化していた1836年～38年の世相の違いにもあるだろう．前著にみられた厳しい貴族批判が，後著の憫笑または哀憐に変わるのもこれに由ろう．

A cet âge, les plus fiers caractères de notre temps, moins abattus qu' usés par les événements de la Révolution et de l'Empire, avaient *au fond des provinces* converti leur activité en idées passionnées, inébranlables, ils étaient presque tous retranchés dans l'énévrante et douce habitude de la vie qu on y mêne.[17]

Il soupira fortement en relevant la tête. Ce soupir était un de ceux que rendait alors la véritable et loyale aristocratie, celle des gentilshommes de province, alors si négligés, comme la plupart de ceux qui avaient saisi leur épée et résisté pendant l'orage.[18]

注意すべきことは，デグリニョン侯爵が *Les Chouans* に登場する数少い剛毅で古風な貴族であり，彼をとりまく貴族一党のサロンが時代錯誤の王朝風な習慣のため，地元民から「骨董室」という仇名で嘲笑されながら，平民裁判官の次男でこの物語の提供者と思えるエミール・ブロンデ

Emile Blondet からアルマンド嬢の姿を通して美化され，また時流を十分心得た元使用人シェネル Chesnel がいまや独立した公証人でありながら旧主家の名誉と財産を死守しょうとするさまが，共感をこめて書かれていることである．これと反対に，その時代錯誤的家風のため思い上った enfant gâté であり意志薄弱であるため小切手偽造の破廉恥罪を犯す御曹子ヴィクチュルニアン Victurnien への批判は峻烈である．しかもそれはパリの名門貴族モーフリニューズ公爵夫人 la duchesse de Maufrigneuse の口をついて出る．

〔……〕ce que vous avez de mieux à faire est de vivre sur vos terres, l'air de Paris ne vous vaut rien.[19]

パリだったら年収10万フランなければ侯爵とはいえぬ．一族あげて総収入が2，3万で，しかもその不足分を自分で作り出すす才能もない侯爵は田舎で暮らすしかないのである．ラスチニャック Eugène de Rastignac (*Le Père Goriot,* 1834～35) は見事にパリ生活資格を獲得した．モーフリニューズ夫人には，そんな青年こそ立派なのである．*La Comédie humaine* の名門貴婦人は往往貴族らしからぬ言辞を吐くが，この公爵夫人のデグリニョン一統批判は，当時の田舎貴族が没落し，パリ貴族が生き残り繁栄した原因をよく説明している．

Vous êtes donc fous, ici? Vous voulez donc rester au quinzième siècle quand nous sommes au dix-neuvième siècle? *Mes chers enfants,* il n'y a plus de noblesse, il n'y a plus que de l'aristocratie. Le Code civil de Napoléon a tué les parchemins comme le canon avait déjà tué la féodalité. Vous serez bien plus nobles que vous ne l'êtes quand vous aurez de l'argent.[20]

こう言って彼女はデュ・プスキエの姪との結婚をすすめる．レストー伯爵 le comte de Restaud はうどん粉商人の娘を (*Le Père Goriot*) フォンテーヌ伯 le comte de Fontaine は元売塩商人で億万長者の娘をもらった (*Le Bal de Sceaux* 1830)．古来貴族王侯も同様なことをして貴

族の血を逞しくし，また財力を強くしたのである．しかしこの夫人の言にもかかわらず，前述のように作者が哀憐と共感を示すのは，こうした田舎貴族の頑固な保守性に対してではないか．貴族の「青い血」を，その誇りを守る者こそ真の貴族であろう．[21]

地方貴族がパリの都雅を模倣しようとしたり，パリ貴族への羨望，嫉妬をあらわすときバルザックはまた元の辛らつな批評家にもどる．*Illusions perdues* 第一部（1837）は，アングレームのブルジョワたちに「小型ルーヴル宮のような華々しさ」を見せるバルジュトン夫人 Mme de Bargeton の貴族サロンを描いているが，詩女神気取りの夫人がすでに少々揶揄されているうえに，その常連たちの紹介も甚だしく戯画的である．[22] 例えば「服装全体が大げさで，いつも上から下まで満足気に自分の姿を眺めるシャンドゥル氏，彼の仕草は

〔……〕agaceries de coq qui lui réussissaient dans la société aristocratique de laquelle il était le beau.

とやられるし，またセピア画の名人（héros）であるブレビアン氏 M. de Brébian は，

le dessinateur qui infestait les chambres de ses amis par des productions saugrenues et gâtait tous les albums du département.

といった調子である．ご婦人方は言うもさらで *La femme de province* で酷評したそのままである．

Les deux femmes, Lolotte et Fifine, également préoccupées d'un fichu, d'une garniture, de l'assortiment de quelques couleurs hétérogènes, étaient dévorées du désir de paraître Parisiennes, et négligeaient leur maison 〔……〕

こうした田舎サロンには，必らずといってよいほどパリ出身かパリ帰りの常連がいて，それが時に作者にかわって痛評する．デュ・シャトレ氏 le baron du Châtelet は徴税官であるが詩人リュシアン Lucien Chardon に対して言う，

La cour était moins impertinente que cette société de *ganaches* 〔……〕 La révolution de 1789 recommencerait si ces *gens*-là ne se réformaient pas 〔……〕 La soumission de cette reine orgueilleuse serait la seule vengeance qu'il tirerait de cette sotte maisonnée de *hobereaux*.[23]

なぜ彼らがパリ風を模倣するとただちに痛評を受けるのか，それは作者がパリ人の眼で見ているからで，彼らの無力，無能，無神経，思いあがりといった，バルザックの抱く理想の貴族像と余りにもかけ離れているからであろう．さらには，得てして彼らの中にはパリに対する劣等感があり，しかも自分だけは田舎社交界のなかでは別格と思いこみ，その自負を傷つけられると，当の相手のパリ人を憎み，村八分にすることがある，その身勝手さが作者には耐えられないのである．[24]

しかし地方貴族の中にも理想的な人々がおり，その人々がバルザックの思慕するところになっていることに注目しなくてはなるまい．そしてその理想像は一つではない．

いまは消滅したブルボン正統王家への忠誠を貫きとおしたデグリニョン老侯爵，同じ型のデュ・ゲニック老男爵 le baron du Guénic (*Béatrix*, 1839) といった古武士風の老貴族は，ショーリュー公爵 le duc de Chaulieu グランリュー公爵 le duc de Grandlieu のようなパリ大貴族に比してその田舎臭さは強調されるが，非常な敬意をもって遇されている．デュ・ゲニック男爵など文盲，粗野の典型的田舎者でありながら，ブルターニュの汚れぬ自然とともに美しく描かれる．彼の死に際して，

A la nouvelle de l'état désespéré dans lequel était le baron, il y eut une foule dans la ruelle; les paysans, les paludiers et les gens de Guérande s'agenouillèrent dans la cour 〔……〕 On regardait comme une calamité publique l'extinction de cette antique race bretonne 〔……〕 [25]

とバルザックの筆は英雄物語的にロマンチックな色彩を帯びるのである．

彼ら古武士にみられる閉鎖性，保守性はさらに極端な形で烈女たちに現われるが，彼女たちもまた，いや一層の讃嘆をこめて描かれる．一族の勢力と名誉を保持するため嫁資の権利を放棄し，またそのために誇りを傷つけられるような安直な結婚を退け，その寡婦の一生を兄弟や彼らの長子の世話や養育に捧げる忍苦の聖女たちである．ゼフィリーヌ嬢 Zéphirine du Guénic やアルマンド嬢 Armande d'Esgrignon などがそれである．

> La beauté du caractère des deux vieillards, car la sœur ne vivait que pour et par le frère, ne peut plus même être comprise dans son étendue par les mœurs égoïstes que nous font l'incertitude et l'inconstance de notre époque 〔……〕, quand le curé de Guérande insinua au baron du Guénic d'aller à Paris et d'y réclamer sa récompense, la vieille sœur, si avare pour la maison, s'écria, ≪Fi donc! mon frère a-t-il besoin d'aller tendre la main comme un gueux?≫ [26]

第三に，トゥールの名門貴族で，その正義感と才知と決断力によって頼もしく感じられる三十代の女性の型のリストメール男爵夫人 la baronne de Listomère を挙げなくてはなるまい．無能鈍感の田舎僧ビロトー師 l'abbé Birotteau のために，彼を酷待する町人や僧侶と一戦を交えようとするが，そのため一族の将来に暗雲が生じたと知るや直ちに断念し，しかもビロトー師には後半生のための年金をこしらえてやりもする．彼女が現代風であるのは，敵方の平民僧トゥルベール師の内心を看破して，惜し気もなく自分のサロンに迎え入れることである．この逞しい現実主義者は「フランスで最も非文学的な町トゥール」を象徴しているが，その彼女を作者はこう描いている．

> 〔……〕noble, digne, tempérant les rigueurs de la piété par la vieille élégance des mœurs monarchiques et classiques, par des manières polies; bonne, mais un peu roide; 〔……〕se permettant la lecture de *La Nouvelle Héloïse*, la comédie 〔……〕 [27]

彼女の妥協は，時代がシャルル十世治下の教権復興期であったことから無理からぬことである．さらに，この逞しい地方貴族婦人の型にヴァットヴィル夫人 la baronne de Watteville がある．彼女もまた信心深く，厳格な人であり，ブザンソンの宗教団体の女王である．しかしリストメール夫人と同様，聖職者を恐れず，また庶民をも恐れていない．夫や娘を冷やかに観察し，事件の対処も現実的である．わが家の別荘地と隣村の境界争いの訴訟のけりがついた時，それを当然の成行きと思った夫に対して，

> Vous n'avez pas encore deviné que ce jugement me coûte trente mille francs donnés à Chantonnit? Ce paysan ne voulait pas autre chose, il a l'air d'avoir gain de cause pour sa commune, et il nous a vendu la paix.[28]

その別荘地開拓の総費用は彼女によって寛大に (noblement) に支払われる．彼女は夫が死ぬと，つまらぬ感傷や偽善を捨てて，娘が拒否した青年と結婚してしまうのである．この貴族婦人に対するバルザックの筆は必ずしも好意的とはいえない．しかしアルベールが十三年間ひたすらそのひととの結婚のため苦辛を重ねた相手アルガイオロ公爵夫人 la duchesse d'Argaiolo が，彼の不実の真偽を確かめようともせず，夫が死ぬや他の貴族と結婚したその非情に対する作家の憤まんが，それとは対照的に，娘のために情を抑えた末に，今度は積極的に結婚を決意し，十歳年下の夫のために二人の子供まで生むといった心意気に対する作者の暗黙の肯定を窺わせるのである．

これには今までにない新しい女性の理想像が覗かれ，同じような恋に走りながら不倫という形でしか思いを遂げなかった *La Muse du Département* (1843) のディナ Dinah de la Baudraye, *La Femme de trente ans* (1831～34) のデーグルモン侯爵夫人 la marquise d'Aiglemont の物語の暗鬱さはここにはない．そして，そこにはバルザック自身のハンスカ夫人への願いがこもってはいないだろうか．

しかし，こうした女性群には共通した一つの大きな欠陥がある．それは

彼女たちが，パリの社交界の亜流で体裁だけ備えた，それこそ死ぬほど退屈な田舎社交界に閉じこもっていることである．国事にも関係しなければ生産もしない．彼女らに起こる事件といえば，トランプの勝敗とかサロン仲間の身辺事とか，あるいは彼女たちに敵意を抱く田舎ブルジョワの社交界や庶民上がりの地方官吏グループとの勢力争いぐらいであって，それはいわば「コップの中の嵐」である．パリの地方に対する文化・政治・経済上の一方的侵掠に逆波を返す力は彼女らとその夫たちにはない．パリに厳然として対立し，それと異質な，あるいは異次元の文明を持ち得るのは地方 la province ではなく田園 la campagne であろう．それは province の中に包摂されながら．また独自の意味を持っているのである．バルザックの小説を読むとき，われわれはそのことに気づく．彼にとって田園と密室（書斎，修道院あるいは牢獄も）は優れた哲学的思索の場である．密室は観念の凝集によって，田園は自然との交感によって．そのとき個は全体となり，全体は個となる．そこでは個々人が地方のサロンのように「分類され (classé) 定義され (défini) 識別され (connu) 整理され (casé) 番号づけられ (chiffré) 順番づけられて (numéroté) はいない.[29] 能力さえあれば田園は人に自己の全一性を取り戻させてくれる．それゆえ，つぎの第四の対象である *Le Lys dans la Vallée* (1835) のモルソーフ伯爵夫人 la comtesse de Mortsauf のような女性を地方貴族婦人として眺めることができるだろうか．彼女とグララン夫人 Mme Graslin (*Le Curé de Village*, 1838～39) あるいはベナシス医師 le docteur Bénassis (*Le Médecin de Campagne*, 1833) とは，いったいどこが異なっているだろうか．フェリックス Félix de Vandenesse の純愛が，彼女が伯爵夫人であろうとなかろうとそれによって変化を来たすとは思えない．彼が彼女に認めた美，気品，情感，知性，意志は，描き出された限りでは，読者一般の永遠の理想女性像として通るし，その女性が，これまた理想化されたトゥーレーヌの自然美と合して，読者にそれ以外の人格性，それ以外の世界との比較を拒否する．

Si cette femme, la fleur de son sexe, habite un lieu dans le monde, ce lieu, le voici ![30]

だが実は，この超越性の中にこそ地方貴族婦人への最大の賛辞と，その理想像の実現の野心がみられるのである．そもそもこの物語は，フェリックスという人物が自分の過ぎ去った恋愛を語る仕組みになっているが，彼はトゥールの地方貴族の子息であり，貴族的躾けと教養を授けられた青年である．したがって彼の理想女性像にはその条件が作用しているといわねばならぬ．彼女との最初の出会いの場はアングレーム公歓迎祝賀会の会場であり，そこにはこの地方の上流階級しか来てはいない．フェリックスにとってそれ以上の社会はなく，それに「崇高な顔」「女王のような身のひるがえし方」で，彼女が貴族であることは容易に直観できるのである．貴族ならばまず荘園地主であろう．だからフェリックスがフラペールへの途上で，上記のような霊感を得たとしても，それは決して神秘的あるいは非現実的な妖精物語にはならないのである．

フェリックスは彼女を田舎婦人と評することは一度もない．その粗末至極な寝室さえ，彼には崇高な，苦患に堪える女性の美しい自己犠牲のしるしとしてみる．むしろ彼女を田舎の貴族婦人の立場に立たせようとするのは彼女自身である．

Madame de Mortsauf entama sur le pays, sur les récoltes, sur les vignes, une conversation à laquelle j'étais étranger. Chez une maitresse de maison, cette façon d'agir atteste un manque d'éducation 〔……〕, mais ce fut embarras chez la comtesse.[31]

La vieille Fille その他の作品では，こうした会話が田舎貴族のしるしとして軽蔑されているのに，モルソーフ夫人の場合は好意的な釈明を与えられるわけである．さらに彼女自身の言葉を一つ掲げてみよう．

Avant de songer, en ma qualité de Lenoncourt, à ce qu'est ou ce que doit être une aristocratie, mon bon sens de *paysanne* me dit que les sociétés n'existent que par la hiérarchie.[32]

あるいは夫人の方が正しいのかもしれない．やはり彼女の現実の姿は田舎の小地主の家内といったところかもしれないのである．フェリックスのような地方青年が恋人を理想化し，自分なりの牧歌詩の世界を作るのは自然なことであって，この作品の粗型とみられる短篇 *Le Message* (1832) でも同様な恋愛が語られているが，語り手は地方青年ながら第三者の立場に立つがゆえに，モンペルサン夫人 la comtesse de Montpersan はそれほどに美化されてはいないのである．それはともかく，モルソーフ夫人にしろ，モンペルサン夫人にしろ，広々とした田園に住み，さらには夫に理解されぬ不幸な美しい三十女であり，そして伯爵夫人であったし，愛する男は二十歳でパリを知らぬ地方貴族でなくてはならなかった.[33] いったいに青年の憧れは，恋人やわが子への献身が気高く（たとえそれが不倫の恋であっても）絶対に汚辱にまみれぬ女性であろう．それは多く田園に住む，ついで地方のささやかな町に．*Le Réquisitionnaire* (1831) のデイ伯爵夫人 la comtesse de Dey, *La Grenadière* (1832) のブランドン夫人 lady Brandon もその一人である．彼女たちはユロー男爵夫人 la baronne Hulot d'Hervy (*La Cousine Bette,* 1846) のように身を汚そうともしないし，またそのような危険な環境にない．

彼ら地方の青年は，美しい恋人によって，その人の住む田園をますます美化するが，田園によって住む人を美化しはしない．むしろ相手によってはその醜悪さを誇張するまでになる．それをレアルな眼といえるかどうかは別として，綿密で厳酷な観察をされる哀れな人物がモルソーフ伯爵でありモンペルサン伯爵である．

Le mari semblait être le type des gentilshommes qui sont actuellement le plus bel ornement des provinces. Il portait de grands souliers à grosses semelles; 〔……〕 son habit noir fané, son pantalon usé, sa cravate lâche 〔……〕, l'aigreur d'un candidat éligible périodiquement refusé depuis 1816, 〔……〕 beaucoup de soumission pour sa femme, mais se croyant le maître et prêt à se

regimber dans les petites choses, sans avoir nul souci des affaires importantes, du reste, une figure flétrie, très ridée, hâlée; quelques cheveux gris, longs et plats 〔……〕[34]

このモンペルサン氏のイメージに，烈しい神経発作から来る妄想と憤怒，暴力まで加えればモルソーフ氏の心像が浮かぶであろう．デグリニョン侯爵とそのまわりの貴族と同様，革命時代に亡命・反乱によってエネルギーを使い果たし，僅かに残った旧所領に戻った彼らだが，大地との苛烈な戦いに心身をさらに痛めつけられて，ほとんど自作農民と変わらず，結局は貴族のもつエゴイスムは露骨に出て，しかも農民ほどの逞しいエネルギーが涸渇しているのである．彼らは作者に地方都会の貴族たちよりもっとひどい扱いをうけている．

しかし彼らに直接打撃を与えているのは田園ではない．むしろ田園生活の効能を享受するのが遅すぎたのであった．1841年の，バルザック最後の田園小説ともいえる *Mémoires de deux jeunes Mariées* では幸福な貴族が描かれる．モルソーフ伯爵のようにロシヤ捕虜となって惨澹たる青年期を送った田舎貴族レストラード氏 le comte de l'Estorade は，美しく賢い妻と美しい田園によって心身の傷と疲れをいやし，やがて一家に敬愛される夫となり，地所をふやし，ついで会計検査院総裁の栄職につくのである．最初彼を見た夫人は「蒼ざめた，三十七なのに五十にみえる，眼は落ちくぼみ，耳も少し遠い，憂い顔の騎士」[35]と評した．彼を立ち直らせた第一の功労者は，十七歳で三十七の彼と無理失理結婚させられた若妻で，ルソーを思わせるような情念の哲学で，自然の中に芽生える夫婦の穏やかで理性的な愛情を作り出そうとして見事に成功する．一種の教養小説といったこの作品の女主人公には少々生意気な女家庭教師の感がないでもない．しかしモルソーフ夫人に，若さの持つ気負いを与え，もっと健全な男を夫にさせていたら，この女性に似たものにならなかっただろうか．若くしてパリを知らず，田園の中で妻として身を修め，完璧な人格を形成して，ついには高官夫人としてパリに姿を現わす．モルソーフ夫人は子供の

ためパリを指向したが果さなかった．明と暗である．六年の歳月をへて，バルザックの理想はむしろ若返ったのではないか．この時期以後に彼が書くパリ小説の暗さに比べると，この田園生活描写はひどく明るい．

結局はこの小説も，田園の貴族婦人が主役となってしまった．そして同時に，彼女たちの個別性からの脱却つまりは理想化の物語の一つである．バルザックは，心の奥底では，パリを特に愛したり，地方を特に軽蔑することはなかったのではなかろうか．自分と同族の人間たちだけへの思慕があったのではなかろうか．

〔……〕 vous devinerez comment cette femme pouvait être élégante *loin du monde*, naturelle dans ses expressions, recherchée dans les choses qui devenaient siennes 〔……〕 [36]

モルソーフ夫人は社交界からも遠く離れ，また家では粗末な自分の部屋で寝起きする．そして若いレストラード夫人は，

En restant dans la solitude, une femme ne peut jamais être provinciale, elle reste elle-même.[37]

と考える．婦人たちばかりではない．好んで孤独を撰び，田園にとじこもる貴族家庭がある．*Illusions perdues* のピマンテル侯爵 le marquis de Pimentel 夫妻やラスチニャック男爵 le baron de Rastignac 夫妻などがそれである．

〔……〕 ils approchaient trop la noblesse de cour pour se commettre avec les niaiseries de la province.[38]

美も徳も幸福も培養されるべき観念だとするなら，孤独の中こそその最高の場であろう．セラフィータ（*Séraphîta*），ルイ・ランベールの物語がそれをよく物語っている．そして誰よりもバルザック自身が，その書斎の中での孤独な戦いによって最良の手本を示しているのである．自分の「北極星」になぞらえたハンスカ夫人が，真に彼にふさわしい女性であったかどうかはわからないが，田園の中にすえられた名門貴族婦人という条件は完全に備わっていたわけである．

註

1) Lettres à Madame Hanska (Ed. du Delta) tom. 2, p. 532. 1844.11. 8付の手紙.

2) ibid., p. 533. mon lp. とは mon loup の略語でハンスカ夫人.

3) Correspondance (Ed. Garnier) tom. V, pp. 743—4. 1850. 5. 5〜7付の手紙.

4) ibid., pp. 462—3. 1849. 1月付の手紙.

5) Correspondance, tom. 2, p. 390. 1833.10.12付の妹 Laure あての手紙.

6) ただバルザックはひたすら妻によって資産や栄位栄爵を得ようとせず名門出身の妻にふさわしい財産，地位を独力で得ようとしている. *Albert Savarus* (1842) は，そうした彼自身の理想像を描いたといえる.

7) Lettres à Mme Hanska, tom. 2, p. 533.

8) 拙稿「バルザックにおける田舎女の意味」(九大教養部「独仏文学研究」23号，1975) 参照.

9) Correspondance, tom. V, p. 247.

10) ibid., p. 741.

11) *cf.* Aurée d'Esneval : Balzac et la Provinciale à Paris, 1976. 女史の説では，褐色の髪をした肉感的なハンスカ夫人が天使的な相貌を帯びるのは，バルザックの無意識的操作 l'inconscient による. (p. 169).

12) *Les Chouans* (Ed. Garnier) p. 175. 引用文中のイタリックは筆者，以下巻末まで同じ.

13) ibid., p. 194.

14) ibid., p. 305.

15) ibid., p. 336.

16) La Comédie humaine (Bibliothèque de la Pléiade) tom. Ⅳ, p. 966.

17) ibid., p. 979.

18) ibid., p. 997.

19) ibid., p. 1093.

20) ibid., p. 1092.

21) *Cf.* Correspondance, tom. Ⅲ, p. 444. 1838.10.18付の妹 Laure 宛の手紙.

22) *Cf.* C.H., tom. V, pp. 193—4.

23) ibid., pp. 167—8.

24) *Cf. La Femme abandonnée* (C.H, tom. Ⅱ, p. 466)

25) C.H., tom. Ⅱ, p. 837.

26) ibid., p. 653. なお立場は違うが，結婚直前に発狂した婚約者に仕えて最後まで苦悩に堪えるサロモン・ド・ヴィルノワ嬢 Mlle Salomon de Villenoix への賛辞

がある．*ef. Louis Lambert*, 1832—33. 及び *Le Curé de Tours*, 1832.

27) *Le Curé de Tours* (C.H, tom. Ⅳ, p. 215)

28) *Albert Savarus*, 1842. (C.H, tom. Ⅰ, p. 1008)

29) *Cf.* C.H., tom. Ⅰ, p. 926.

30) *Le Lys dans la Vallée* (Ed. Garnier) p. 29.

31) ibid., p. 39.

32) ibid., p. 103.

33) *La Femme abandonnée* のヌュエイィ男爵 le baron de Nueil の恋が自己崩壊するのは，彼がパリになじみ過ぎていたからである．パリの毒といえる．

34) *Le Message* (C. H., tom. Ⅱ, pp. 401—2)

35) *Cf.* C.H., tom. Ⅰ, p. 220.

36) *Le Lys*…. p. 43.

37) C.H., tom. Ⅰ, p. 237.

38) C.H., tom. Ⅴ, p. 196.